

介護職員自己評価表

2026年4月14日

事業所名	通所介護 デイサービスリハビリセンター瀬々串
------	------------------------

	正社員	非常勤社員
社会福祉士		
介護福祉士	4人	
理学療法士	3人	
介護支援専門員	1人	
実務者研修修了者その他	5人	
准看護師	1人	1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よくできている	なんとかできている	あまりできていない	ほとんどできていない	備考
前回の課題に関する改善	12.1%	24.2%	55.6%	8.1%	

前回の改善計画
前回計画においては、認知症ケアに必要とされるコミュニケーションスキルを含む対人援助技術の向上を重点目標として設定した。今回の自己評価では、多くのスタッフがコミュニケーション不足および意思疎通の困難を認識していた。一方で、日常的な関わりを通じて一定の改善がみられる職員も確認され、前回計画の効果が一部で認められた。また、認知症の方との関わりを肯定的に捉える姿勢もみられ、意欲面での変化が示された。課題の背景としては、経験年数や得意分野の差異に起因するスキル格差、業務量や心理的負担、ケア方針理解度のばらつきなど、組織的要因の存在が推察される。これらを踏まえ、介護技術向上に向けて外部講師による研修を計画し、スタッフの能力強化とケアの均質化を図る体制整備が求められる。
前回の改善計画に対する取組み結果
コミュニケーションスキルを含む対人援助技術については、相談員および担当ケアマネジャーが利用者の習慣・背景等を把握し、家族情報を踏まえたカンファレンスを実施することで、適切なコミュニケーションにつなげる体制を整備した。また、利用者の性格等に基づくグルーピングを行い、問題行動の発生頻度は減少した。メンタル支援は生活支援員、有酸素運動・レジスタンス運動はトレーナー、機能訓練は理学療法士、健康観察は看護師が担当し、専門職による多職種連携のもと支援を実施した。支援参加率は個別機能訓練が最も高く、パワーリハビリ等も参加者が増加している。家族からの評価は向上し、利用者数は増加傾向にあることを確認した。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よくできている(60以上)	なんとかできている(50~59)	あまりできていない(40~49)	ほとんどできていない(39以下)	合計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	11.1%	33.3%	44.4%	11.1%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	11.1%	22.2%	55.6%	11.1%	100%
SECTION 3	食事について	11.1%	11.1%	77.8%	0.0%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	11.1%	22.2%	55.6%	11.1%	100%
SECTION 5	排泄について	11.1%	22.2%	66.7%	0.0%	100%
SECTION 6	入浴について	11.1%	55.6%	22.2%	11.1%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	11.1%	33.3%	44.4%	11.1%	100%
SECTION 8	服薬について	11.1%	22.2%	55.6%	11.1%	100%
SECTION 9	意思疎通について	11.1%	11.1%	66.7%	11.1%	100%
SECTION 10	行動障害について	11.1%	22.2%	55.6%	11.1%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	22.2%	11.1%	66.7%	0.0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項
個別機能訓練については、理学療法士が計画に基づき提供し、有酸素運動および集団で実施するコグニサイズは、トレーナーと生活支援員が連携して実施した。また、巧緻作業、回想療法、表情分析を用いた心理療法等の認知症ケアは生活支援員が担当し、専門職が役割を分担する多職種支援体制を整備した。利用者からは支援内容に対する肯定的意見が寄せられ、利用日数や利用時間に関する増加要望も確認された。さらに、機能訓練の効果は利用者のみならず職員にも及び、コグニサイズを積極的に実施する職員が増加した。取り組みの結果、コミュニケーションに不安を抱く職員は減少したが、意思疎通を重視する傾向がみられ、パラ言語を用いた感情理解手法の習得が必要と判断された。介護技術については、各職員の不得意分野をOJTにより補完し、メンタル面の課題は高頻度のスーパービジョンにより支援した。
主任 梅津 豊

外部評価者
こちらのデイサービスでは、機能訓練への参加意欲が高い利用者が多く、パワーリハビリやトレッドミル、ニューステップなどの機器を使った有酸素運動やレジスタンス運動が積極的に行われていました。訓練の効果を実感している利用者も多く、取り組みが高く評価されている様子がうかがえました。また、コグニサイズや巧緻作業は小集団で実施され、回想療法や表情の変化を読み取る心理療法など、認知機能の維持・改善を目指した多様なプログラムが提供されていました。ある利用者は、昔の写真を使った回想の場面で笑顔が増し、周囲との会話が自然に広がるなど、良い変化がみられるようでした。一方で、比較的元気な利用者が多いことから、コミュニケーション力が問われる場面も多く、接し方に悩む職員もみられ、技術面で不安を抱える職員も一部でみられました。業務中に生じた課題を短時間の残業で振り返ることもあった一方で、教育プログラムの見直しが必要になる可能性があります。ただし、日々の課題はOJTである程度解消されており、スーパービジョンも高頻度で行われていることから、相談しやすい環境づくりが進んでいると感じられました。総合的には、利用者に適した興味深い取り組みが多く、多職種が協力して支援を行っている点が評価できます。今後も地域に根ざした事業所として、より良いサービスの提供が続くことを期待しています。
〒891-0151 鹿児島市光山2丁目3-5 6 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 博士(社会福祉学) 川崎 竜太

